
BeautiFoolのエッセイ

アルル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Beautifulのエッセイ

【NZコード】

N27531

【作者名】

アルル

【あらすじ】

全ての物書きが知らなければならず、また、考えなければならぬ事を綴つた物です。基本的には、物の影響力、その功罪について述べています。

（前書き）

これは、僕が常から思つてゐる事を、エッセイという形で著した物です。ここに活躍為さる方々には是非読んで頂きたく、そして、考えて頂きたい問題について言及しています。ちなみに、僕は推理物、ホラー、官能小説以外は大抵読み、かつ、好いています。だからこそ、考えなければならないと思い、その問題を綴りました。是非、皆様のご意見をお聞かせ願いたく思います。（これは『激文』（激しい文という僕の造語です）ですので、そういう物が苦手な方は、ご遠慮下さい）

僕はアマチュアの作家で、名をアルルと言つ。アルルといふのは、西洋での“道化師”という意味で、本来はアルルカンという。

その名を選んだのには訳が有る。自分は脳神経に異常が有り、かつ、神経衰弱に陥つてゐるからである。つまり、不良品なのである。これは同じ苦しみを持つ他者に対し、非常に失礼な言い方だが、誤解の無い様に言うと、自身がそうであると認識するに留めているので問題は無い筈である。

その他にも自身の生い立ちを振り返つてみると、正しくこの名が相応しいと思うからである。

そんな事も有り、僕は常からよく物事について考える性質である。何故なら、不良品は始末されて然るべきだからである。下らぬ生き物は殺されて当然。これが現代のリアルである。真なるリアルとは、喰うか喰われるかという至極当然の摂理から成り、それが守られないのも現代のリアルである。然るに、現代人は真のリアルを解し得ないものと考えられる。

それがために生かされている訳であるが、自分は真のリアルに則つて死を甘んずる覚悟である。不良品という認識に立つてから、それは自身にとつての本来であると考えるようになった。然し、生命的の誕生、その息吹の眩しさに打たれ、僕は最後まで、命を使い切るまで生きようと決心した。そこで思い立つたのが書き物である。自身の体験や、現状の矛盾、在るべき理想を追わぬ者達の存在の露呈、その存在から成る功罪。それらを綴りたいと思つたのである。手段としては他にもポンチなどがあるが、僕はそこまで絵が上手い訳ではないので、それは今のところ考えるだけ無駄である。^{ひつきょうう}畢竟、書き物以外に出来る事は、現状において他に無いのである。

之までの件で解る通り、僕は“ライトリアル”を否定したいので

ある。然しながら、それは僕の思い上がりであつたらしい。僕の文才は無きに等しく、考える事も又、子供のそれと何ら変わりの無い事を告げられ、それを悟るに至つた。よしんば、誰かに通じたとして、それが何らの意味も持たないのであれば、僕の存在は既に無きものと考えるのが至当である。なれば、ここで潔く冥途にでも逝くのが正しい。それが適えば、僕も嬉しい。僕は常に死ぬ事を考えているからである。誤解してもらつては困るので付け加えるが、自殺願望が有る訳ではない。いや、無いとは言い切れないが、ただ、黙つて死ぬ気にはならない。死ぬるなら、笑つて死にたいと、いつも思つてゐるのである。なれど、死ぬる為には魂を抜く必要がある。然し、そのような事は頻繁には起こらない。されば、生きて行くのが自然である。それは僕にとつては死ぬる事よりも遙かに耐え難い事ではあるが、物質として、肉として、この世に在る限りは何かしらの事をせねばならぬのが、この世界、いや、社会の制約である。

“ライトリアル”とは真に恐ろしいものである。

ここで本題に移るが、僕の言つ“ライトリアル”とは先述の通りであるが、それはそれ、人間をなるたけ生かそうと理論む考え方である。それは幸とも言えるが、不幸とも言える。これも先述の通りである。では、何を、つまり僕が必死にならなければならないものはといえば、『教育』に関しての事である。

“ライトリアル”に準じた書き物は皆が皆、ライトノベルである。本来のライトノベルは勿論、文学、純文学、或いはその他の書き物に至つても一般である。

何故これらを否定しなければならないのか、それは、教育に関する学問を修めた者であれば容易に氣の付く事である。説明は却つて、解り難くするだけであるように思われるが、敢えてしよう。

まずは、肯定すべき物について考えてみよう。それで、否定すべき物が解る筈である。

本来書き物の役割は情報を伝達する為のものである。文字が生まれ、それを駆使し、後世に残すのが目的である。そこで問題となる

のが、その情報に付加価値が有るか否かである。単なる情報であれば、目を通すだけで良い。然し、そこに書き手の想いや理念、思想といった類が込められている場合、流す訳にはいかない。当然、考え方、理解すべきかどうかの選択をしなければならない。取捨選択をし、取り込むべきは取り込み、捨てるべきは捨てる。それが至当である。そういった経験は、実際の体験ではないにしろ、経験値として読み手の脳内に保管され、後の人生に影響を及ぼす。正か負か、それは読み手の理解に因るところであるが、確かに人生の中で一度くらいは、恐らく表面化するだろう。その時、遣り取りの相手に対し、良い効果を持つものであれば、きっと、その者は喜ぶだろう。それは定めし、情報の価値が肯定されたと言つて差し支えないだろう。尤も、その逆もあるのであろうが、それもまた、持ち手の解釈次第であるから、責任の半分程は読み手の不手際として覚悟されし、というのが僕の意見である。

畢竟、書き物は全てにおいて、影響力の功罪を認めなければならぬのである。

然し、それを蔑ろにする者達がいる。それが、悪い意味でのライトノベルを書く者である。情報の持つ脅威を無視し、ただひたすらに“免罪符”を求めるプロテスタントである。

彼らは己の罪を知らない。それだけの教育を受けていないのか、或いは、人を騙くらかして平気な面をしていられる不徳の輩である。文学、純文学、ライトノベル、その他の物。いずれにせよ、自己の責任を認め得るだけの甲斐性を持たぬ者達が、未来を担うであろう子供達に、考え無しに影響を与えていた。これは忌々しき事態である。また、そんな時代である。

僕には、光をくれた天使がいる。彼に地獄を見せたくない。死に惹かれる僕を生に導いた彼に、間違つた世の中を生きて欲しくはない。無論、他の子供達にも歪曲した社会を歩かせたくない。ならばこそ、僕は書くのである。否定されようが、そんな事は関係無い。押し通つてみせる。それが、僕の生きる理由だからである。命

は使う為に、いや、遣う為に有る。少なくとも僕はそう信じる。全てを書き終えたなら、僕は甘んじて死の床に就こう。それまでは、誰が相手でも、打ち倒す。敵わぬ者など居らぬ。僕の信念において、必ず、捻じ伏せる。

さあ、これを読んで猶掛かって来るなら好きにするといい。いつ何時でも、誰の挑戦でも受けよう。その代わり、覚悟せよ。僕は書く事に命を懸けている。つまり、戦いに於いても命を懸ける。捨てる覚悟のある者のみ掛かって來い。そうでなければ去れ。文壇は自由と共に先述の通りの責任が在る。功罪を問わぬ者は、そこに居座る資格は無い。また、その事に気の付かぬ者は、まず読むことから始めよ。

ペンは劍より強し。然し、批評家は既にペンを置いた。でなければ、ここまで無責任な書き手が容認される筈がない。また、これ程醜悪な文壇などには成らぬ。なれば、そのペン、僕が頂こう。そして、幾らでも書こう。風評被害は何も事業主のみに限つた事ではない。社会が変貌を遂げ、生きる意味さえ解らないこの世界に於いては、全ての生命がその対象である。リアルと現実を混同する愚かな考えは、ここに至つて捨ててもらおう。

哲学というものが有る。それをどれ程の人間が意識する事が出来るだろう。子供達は例外であるが、つまり、其は何ぞや、という疑問に満ちているからである。日々をその疑問を満たす為に生きているのが子供達であるからである。これは、人間の本質と一般である。理想を追うには哲学の恩恵、天啓に纏るより他無い。されば、軽視し得るものでない事は言つまでもない。かつての世界に生きた偉大な哲学者達は、世界を証明すべく、あらゆる学問を駆使し、哲学の要素とした。無論、とんでもない考えも有るが、それに関しても無駄に生を消費した結果ではない。参考としては、イデア論、また、半身を求めるべく生を全うするという考え方がある。一考の余地は充分に有ると思つ。

心理学といつものも有る。一般には、性格診断や、医療に役立つ

ている。が、然し、それはあくまでも一般的な考え方であり、ここでの定義とは異なる。ここでの定義は、文章に於いてどのよつた役割を持つかであり、社会に貢献するそれとは相反すると言つても過言ではない。改めて解説するが、僕はこの社会を容認しない。その上で語る事を再認して欲しい。

ここでの心理学とは、人物の心理描写、また、自身の心を知る為の役割を担う。それを以つて初めて物書きと言える。疑う者は、思うままで筆を振るつてみるが良い。笑う事さえ出来ない愚作が出来上がるだろう。初心者はそれで良いが、半年、一年、或いはそれ以上の経験を持つ者がそれで良いというのなら、定めし彼氏彼女は馬鹿に相違無い。酷である事を承知ではつきりと言おう。そんな連中が文壇に居座る事は決して許されない。思考は努力であり、かつ、最低限の制約である。それを放棄する者は淘汰されべき存在である。さて、本題から大分逸れてしまつたが、言つておかなければならない事があるので、そこは容赦されたし。

本来、物書きは自身の思う事を書き連ねるものである。然し、それは先述の通り、愚に墮ちるのが本望でないのなら、やはり、勉学に務むるのが至当である。書く物によつては必要でない場合もある。という反論は、受け付ける氣は無い。何を書こうとも心理描写の乏しい物は、人の、読み手の心に響かない。ひつきょう畢竟、それは単なる体験談であるからである。また、単なる妄想であるからである。つづく幾ら繕つたところで、それは本質的に物とは言えない。ここでまた解説するが、物という漢字には“物語り”という意味が含まれている事を承知されたし。その上で、読まれたい。

つまり、書く事を以つて、それを自己啓発とし、かつ、読み手に對してもそうであるよう仕組むのが物書きの勤めであると言える。一般に、子供達に人気の高いライトノベルも、良い物はきちんとその要素が盛り込まれている。で、あるにも関わらず、現代の文学などは、単なるエゴイズムに過ぎない物が多い。これは大変嘆かわしい。本来とは逆転してしまつているからである。

その問題についてはここでは詳しく触れる気は無い。何故なら、それは非情に纖細であり、かつ、一義的に捉える事は出来ない代物だからである。

また、かなり、話が逸れてしまった。故に、簡潔に書こう。

心理学に於いて有用であると思われるものは、es、ミーム、ゲシュタルトである。どれも、難しいものであり、完全に理解している者などこの世には居らぬが、この三者は、個人的な意見ではあるが、哲学とも関連する事から、是非、物を書く上で研究の対象とされたい。ちなみに、ミームは心理学ではないという意見があれば、他でやって欲しい。

さて、ここまでが序文であり、そして、様々な因子、功罪を纏め上げたその見地からの全体を見据えた意見であるが、どうだろ。定めし、腹の立つた事だろ。だが、それはこちらとて同じ事。

さあ、先述の通りである。我こそはと思わん者は掛かって來い。僕を死の床に導く事の出来る者よ、集え！全ての挑戦を受けよう。甘んじて死を頂こう。

念のため確認しておくが、『先述の通りである』という言葉の意味は理解しているだろうな。感想なら幾らでも頂くが、それ以外の、挑戦と受け取れるものに対しては、社会の敷いたリアルなど通用しない事を宣言する。ヒューマニズムは受け付けない。また、その様な意見など、既に掃いて捨てる程ある。今更そんな事を言いたいのなら、他へ行け。自身の信念に懸けて僕を打ち倒さねばならぬ者のみ掛かって來い。文学を遺る者、純文学を遺る者、ライトノベルを遺る者、また、その他を遺る者。ジャンルは問わぬ。

僕の好む相手としては、ファンタジー、SF作家である。言靈の詠唱を無視した魔法師達が活躍する物。未来を想定している割には、敢えて難しく言うが、『キベルネティクス』すら登場しない機械物。面白いのは良いが、全体それは“本当”か？僕は万能の神は信じはないが、八百万やおよひすを信仰している。故に、言靈の重要性は知つてゐつもりである。また、現代でもあらゆる所で活躍しているキベル

ネティクスを無視したSFなど、笑止である。

ここまで挑戦的に書けば解ると思うが、實際、挑発しているのである。自らを見詰めなおし、かつ、これからに活かそつと考え得る者は、是非この挑発に乗つて欲しいものである。

最後に、矛盾していると思うかもしれないが、これも敢えて言う。プロ、アマを問わず、全ての物書きに幸あれ。

(後書き)

どうでしたでしょうか？何か思つ所は有りましたでしょうか。もし、何かしらの「」意見が有るようでしたら、是非とも感想など賜りたく思います。（荒らし目的の方の書き込みは即刻管理人様にご報告申し上げる次第ですので、どうぞ「」遠慮下さる）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2753i/>

BeutiFoolのエッセイ

2010年10月8日15時34分発行